



信楽焼の歴史と現況

信楽^{しがらき}といえば狸や火鉢の焼き物を思い出すほど有名ですが、ここは本県の最南部に位置する甲賀郡、信楽山地に囲まれた盆地の町です。周辺は、長石と良質な陶土の産地でもあります。

信楽焼の創始時代

信楽焼は、県内の数ある地場産業の中でもユニークな産物として、全国的にも名声を馳せています。

この信楽焼は、1200年の伝統を持っていて、日本六古窯の一つに数えられています。創始は天平14年（742）で、聖武天皇が奈良から信楽（当時は柴香楽と書きました。）に都を移された時に瓦を造ったのが、その始まりといわれています。

その後、平安時代には一時衰退しましたが、鎌倉時代になって頼朝の天下平定と共に農業が盛んになると、種壺・水瓶・播鉢等の需要が増加し、盛んに生産されるようになりました。

この鎌倉中期には、宋代陶磁器の影響をうけて瀬戸・常滑・越前・丹波・備前・信楽等が、陶磁器の産地として本格的に生産を始めます。この時代が日本の陶磁器史の夜明けと

言っても過言ではなく、これ等の産地を称して日本六古窯と言われています。

茶器時代（室町～桃山時代）

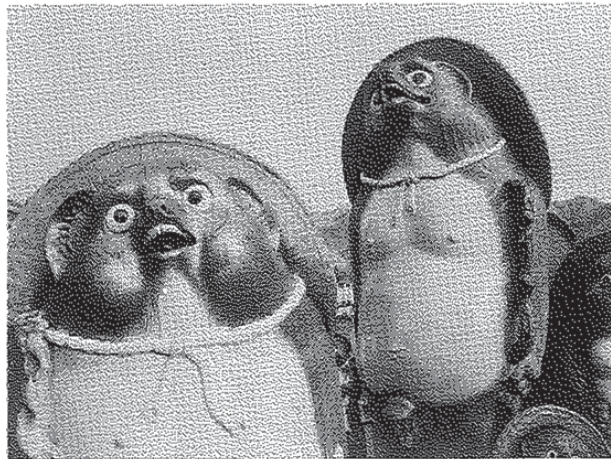
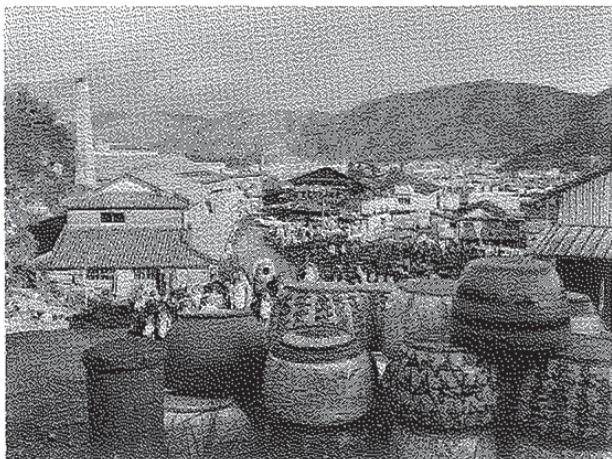
室町時代は、製品の殆んどが茶壺・種壺で、今でも当時の物が多く残っています。形も鎌倉時代より大きくはなっているものの、依然として穴窯で焼成しています。

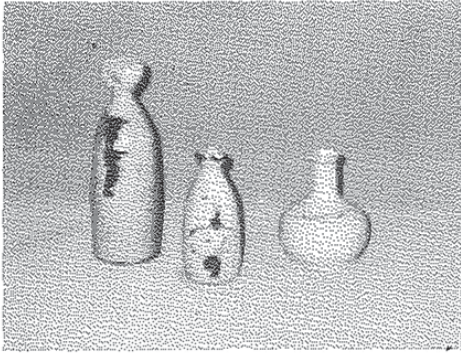
室町中期になると村田珠光^{しゅこう}によってはじめられた茶道は、安土桃山時代にかけて流行しましたが、その後の有名な茶人（武野紹鷗^{いっおう}・千利久^{せんりく}・千宗旦^{せんそうたん}・小堀遠洲^{こぼりえんしゅう}等）の影響で、当時農家で使用されていた種入れ・麻の緒入れ等が旅枕、鬼桶・蹲る壺等の茶道具に転用されました。このことが、その後の信楽焼の発展に絶大な力となるのでした。

日用雑器時代（江戸時代）

江戸時代になると、宇治の御茶詰制度が定められ、幕府や各大名に対して信楽茶壺に宇治茶を詰めて贈るようになったことにより、御用茶壺やその他の茶壺の生産が盛んになりました。

「ズイズイズッコロバシ胡麻味噌ズイ、茶壺にとられてトッピンシャン」というおらべ歌がありますが、実はこの御用茶壺道中を歌





酒器



神仏器具

ったもので、信楽焼の名声は一だんとあがりました。

この時代までの窯の形態はほとんど穴窯であり、現在「古信楽」といわれている各種の名器は主としてこの時代までのものをいいます。

江戸時代の中期になると焼成炉も登窯が築かれるようになり、商業の発達と共に製品も日用台所用品が生産されるようになります。また、同じ信楽の内でも場所によって製品がちがうといった地域性が出てきます。長野村は主として大物を得意として水瓶・火鉢・味噌壺・紅鉢・播鉢を作り、神山村は酒器・土瓶・茶器などを、勅旨村や黄ノ瀬村では灯具・神仏器具などの小物を生産していました。また江戸末期には問屋制度も発達し、需要に応じて多種多様のものが信楽で作られたのです。

しかし、この当時の輸送方法は主として木津川を利用し筏によっていましたので、販路は京都、大阪方面などごく狭い範囲に限られていたようです。

火鉢時代（明治から昭和30年頃まで）

明治時代に入って西洋文明が導入されます

と世は技術革新の時代となり、人々の生活様式も変わってきました。それにつれて信楽陶器も大きく変化していきます。

まず、金属函（ブリキ缶）と石油灯具の出現によって、それまで信楽焼の主力製品であった茶壺と灯具の需要が減退し、全体的に非常な不況に見舞われました。そして、信楽としては初めての製品転換をせまられ、出現したのが製糸用の糸取鍋と海鼠の火鉢でした。火鉢は、信楽特有の粘土が熱や衝撃に強いことと保温性にもすぐれていることから、消費者にも認められ信楽焼の主流を占めるようになりました。

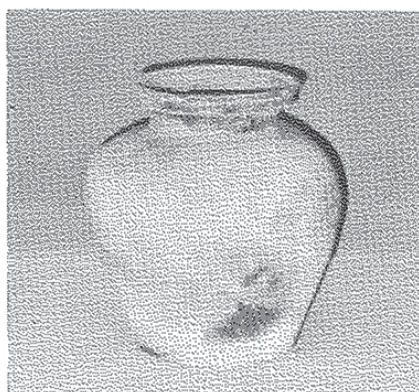
明治22年の東海道線をはじめ、その後次々と鉄道が開通して輸送力が大幅に強化されると、信楽焼も全国的に販路を拡大することになって活気を取りもどしました。

大正時代になると、石膏型による成形が可能となって、火鉢やその他の製品が徐々に量産化できるようになります。

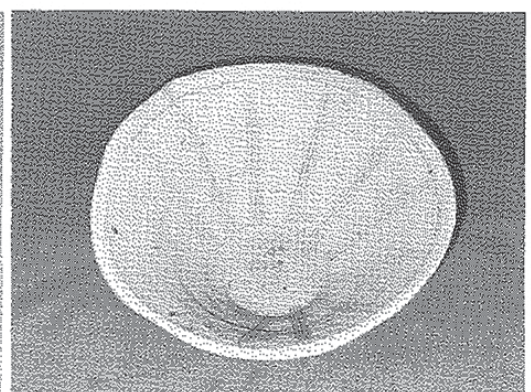
昭和3年には、滋賀県立信楽窯業試験場が創設され、業界の技術水準の向上に益々拍車がかかけられました。8年には国鉄信楽線も開



御用茶壺



種壺



播鉢



登窯の風景

通して、輸送力が増強され、信楽焼産業発展の基盤ができました。しかし、第二次大戦（1941～1945）中は、日常台所用品などは鉄製品に代わるものとしてほとんど陶器で作りました。例えば、鍋・ホーライ・ガス器具などの台所用品、神仏器具から、街頭の郵便ポストや、軍用の地雷火・手榴弾の類までも陶器で生産されたものです。

昭和20年8月に戦争が終わりますと、また再び火鉢の全盛時代を迎えます。しかし、昭和30年代に入って、木炭の時代から石油の時代となり、生活様式も和風から洋風が変わるようになって、火鉢の需要が急激に減退してきました。

新しい製品

ここで信楽としては第二の製品転換にせまられ、出現したのが観葉植物の植木鉢です。また、焼成炉も江戸時代から続いてきた登窯から、重油単独窯に移行します。そして、110基もあった登窯は昭和38年頃には10基程度になり、この10基も古信楽調の花器・茶器の生

産を続けていこうとする業者のものでした。このように産地ぐるみで製品と設備を同時に転換したのは、全国的にもめずらしく、ユニークな事例としてその後も話題になっています。

また、昭和35年から重油トンネル炉（量産型式の連続炉）により、古信楽の特色を生かしたタイルが生産されるようになります。それまでは、県の窯業試験場で試作していましたが、本格的に建築業界に浸透したのはこの頃からで、タイルはその後順調に生産されていきます。

また、信楽焼の誇る大物成型技術を生かした室内装飾具、屋外の庭園陶器類は、昭和40年代の高度成長の影響による建築ブームののって、タイルと同様順調に伸びていきます。

花器や食器についても機械文明の異常な発達に抵抗するかのようになり、人間性の回復が叫ばれ、手作りとの味のある製品が愛用されるようになります。信楽食器・花器はそのようなニーズにあった製品として需要が増加してき



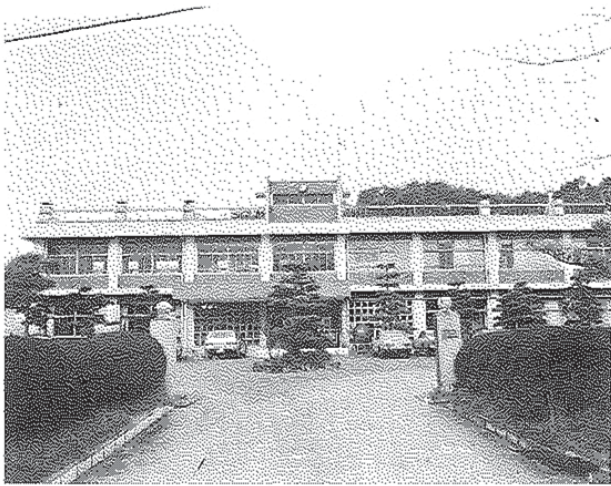
庭園具



植木鉢



たぬき



県立窯業試験場

ます。

しかし、その景気はいつまでも続かず、誰しも予想しなかった石油パニックが昭和48年秋頃に発生し、世界経済は低成長時代を迎えます。本県の山奥にある信楽の土地にも、その影響は波及し、主力の植木鉢も除々に需要が減退してきました。そのため工程の合理化・製品の高級化・生産調整等について検討されています。また、他の品種についても一時期低迷状態にありましたが、伝統の強みを発揮し、新製品の開発も旺盛で信楽町が一体となって努力しました。

昭和49年5月に伝産法が制定されると、信楽焼も長い歴史の中で培われた伝統技術が認められ、昭和50年9月に伝統工芸品に指定されました。

また、昭和50年5月27日には信楽窯業試験場に天皇皇后陛下の行幸啓があり、前回（昭和27年）の行幸時に比べて製品が随分多彩で進歩しているのを御覧になり驚いておられました。その際、中庭に陳列してあったミニ蛙を御所望なされたことは、今も強く印象に残っています。

現在、信楽焼関係の業者数は

表I 業者数

業種別	数
焼成業	一三〇
素地製造業	三七
石膏型製造業	七
陶土製造業	八
長石採集業	八
絵付業	四
陶器販売業	七二
その他	六

表II 品種別生産率

S52年度

品種	率(%)
植木鉢	三六・六
庭園用品	一一・六
花器	一〇・〇
建材	二〇・五
食卓用品	二一・〇
その他	〇・三

272企業（表I）になり、その従業員数も約2,000名になっています。また、生産高は約65億円（販売高は90億円）で、品種別の内訳は表IIのとおりです。

以上で信楽焼の推移についての概略を述べましたが、本県の誇る伝統産業の発展を心から期待したいものです。（県立窯業試験場長西尾千秋氏提供）

